

2024 年度 学校自己評価報告書(法政大学第二中・高等学校)

教育理念・目標	教育理念:本校における教育は、人格の完成をめざして国民的共通教養の基礎を築き、平和的で民主的な国家および社会の形成者を育成することを目的とする。 教育目標①:人類および民族のあらゆる分野における歴史的・文化的遺産を体系的に学び取り、自然と社会・人間に対する認識を深める。 教育目標②:獲得した認識を総合し、自然との共生・諸民族の共同など、人類社会のもつ諸課題と向き合う視野を培う。 教育目標③:学ぶことの意味と喜びを知り、常に学問的好奇心を発揮し、生涯にわたって成長を遂げることができる土台を獲得する。 教育目標④:自己を客観化し、社会の中でどのように生きるかを考えることにより、一人一人が個性を獲得し、自分の生き方を自分で決める能力をつける。 教育目標⑤:自ら諸課題の解決・現状の変革を担おうとする自主的精神と皆で力をあわせ共同での取り組みができる自治的な能力を獲得する。 教育目標⑥:高い品性と社会性を身につけ、不正・腐敗を許さず、社会正義を確立する自律の力を獲得する。
重点目標	1、教育目標を達成するために生徒一人一人に高い学力をつけさせるための具体的実践の研究をする。 2、男女共学化 6 年目に際し、新たに表出する課題に対して対応する。 3、新図書館やICTを活用した教育の研究と実践を深める。 4、中高 6 ヶ年を視野に入れた生徒の自主活動を伸ばすための工夫をする。 5、法政大学・育友会(PTA)・同窓会・地域との連携を強化する。

共通課題

No.	評価基準	学校自己評価				学校関係者評価
		年 度 目 標		年 度 評 価		実施日 2025 年 7 月 13 日
		現状と課題	具体的な取組	達成状況	次年度への課題と改善策	学校関係者からの要望、評価等
1	建学の精神 (建学の精神や理念の理解と意識化)	中学 1 年「校外授業」、高校 1 年「新入生合宿」において、建学の精神や理念について、重点的に取り扱い理解を深めた。教材『学びのつながり』などを使用して、建学の精神や歴史などの学習を行った。				左記について異論はありません。
2	組織運営	引き続き、組織的・集団的な学校運営を重視した。特に 2024 年度は次年度に向けて iPad 導入が控えていたこともあり、タブレットを用いて本校の教育をどう深化させていくか、同時に利用方法や個人情報の扱いなどの議論をすすめ意思統一をはかってきた。また様々な課題に対して、個でなく教員集団として取り組んでいくとともに、情報の共有・教訓化も行った。アプリの学習会や、校内・外での教研集会、三付属校教研など様々な学習の場を通じて積極的に教員組織として学びを深めた。				左記について異論はありません。
3	教育活動 (教科、生活、進路、行事、自主活動等)	教科教育においては、学校改革の一環として、「教科教育における 6 力年体系化」の中長期計画に基づいたカリキュラム改革をおこなった。高校新教育課程が実施 3 年目を迎え、前年度に新教育課程が完成した中学とあわせ、年間を通して中高 6 力年カリキュラムの体系化を意識した教科活動を展開した。とりわけ活動型の学習をカリキュラムに位置づけ、他者と協働しながら思考力・表現力を培う実践を積極的に進めた。このように学力向上に資するカリキュラムの再構築と実践を展開し、学力の到達状況に応じて特別指導や課題設定などの学習支援を継続して法政大学推薦に値する学力へ到達させることに努めた結果、各教科目の学力到達度、および法政大学への推薦率について前年度の水準を維持することができた。来年度も学校コンセプトである「調べ、討論し、発表する」教科活動の一層の充実に向け、ICT 機器や学習情報センターとしての図書館、新たに導入する生徒用タブレットを活用した教科活動を展開する。これとあわせ、身につけさせたい学力の内実を精緻に分析し、学校構想中長期計画を念頭に置いた教科教育のあり方について検討し、具体化する。 生活指導においては、HR、行事、クラブ活動など、従来通りに実施することができた。学校行事では、中学体育祭は天候にも恵まれ、青团、オレンジ団に分かれ各競技を実施した。また、今年度も保護者が観覧できる形式で行い、保護者の方にも生徒の成長を見て頂くことができた。高校体育祭は3学年合同で実施し、暑熱対策のため一部内容を変更したが、全体としては生徒主体の有意義な内容となった。二中文化祭・二高祭は中・高ともに工夫をこらし、各クラス教室で企画を実施した。多くの一般の来校者があり、生徒たちの発信の場として充実したものとなった。また、外部の方による飲食スペースも引き続き実施し、生徒・来校者ともに賑わいをみせた。1 年間の流れの中で、一つひとつの行事への取り組みを通じて、生徒たちの様々な能力を成長させる事ができた。宿泊行事では、一部インフルエンザ等の感染症の広がりがあったものもあり、途中離団する生徒もいたが、全体としては、その過程を通じて、人間関係を深め、豊かな経験を行うことができた。クラブ活動においては、生徒たちも学習との両立を行いながら熱心に取り組み、大きな成果を残した。				4 月よりタブレット授業が開始され、授業の仕方がだいぶ変更となっている。以前から多くの教科書を持参し、授業を受けていたが、教科書のモニター表示、又はタブレット表示により、学校に持参する教科書の量も大幅に改善され、生徒の負担軽減に繋がりつつ、タブレット活用により、ノートの電子化やペーパーレス化に繋がっている。
4	安全・保健管理 (保健、安全、防災、施設等)	年度当初(4 月)に定期健康診断・体力測定を実施した。6 月には顧問・監督・コーチなどクラブ指導者を対象とした健康安全研修を含むクラブ指導研修会を実施した。健康安全講習会については今年度も 7 月に生徒・教員ともに実施した。研修会・講習会では熱中症対策や AED の使用方法を含む心肺蘇生法や救急法についての学習を行った。また、年間を通してカウンセリングルームを開室した。生徒、保護者と必要な連携が取れる体制をつくり、年間を通して維持できた。避難訓練については、「火災時の避難経路の確認」「大規模地震発生時の対応」に関わって合計				昨年度、部活動において重大な怪我を伴う事故が発生しており、反省を踏まえ引き続き安全管理に注意が望まれる。

		4 回実施した。また、HR 教室以外の場所で地震が発生したことを想定した避難訓練も実施した。避難時の注意事項の確認・徹底も行い、整然と実施することができた。次年度も継続して大規模地震発生時の対応について検討を深めたい。	
5	連携 (保護者、卒業生、地域等)	育友会との連携を密に行い、育友会理事会の円滑な運営に寄与した。「育友会集中ミーティング」においては、学校と保護者の充実した意見交流を行うことができ、学校の教育活動を充実させることができた。日常的な保護者連携としては、年 3 回(7 月・12 月・3 月)の保護者会やクラブ保護者会を軸に、クラス担任、養護教諭、カウンセラーを中心に、各学年がチームとなって生徒個々の実態把握と対応を行った。同窓会との連携については、2019 年度以降、連携はとれていない。2025 年度以降は新たな連携方法を追求する必要がある。地域等との連携では、「地域に愛される法政二中高」をめざし、地域の方々からお寄せいただく各種ご意見への対応につとめた。武蔵小杉駅近辺の清掃への参加や二中文化祭・二高祭の商店街の出店等、地域との良好な関係を構築することができた。	長年問題となっている登校マナーについて、生徒を中心として積極的に取り組みを行い、少しずつ改善され、地域の方々にも理解を得られるようになってきた。引き続き継続的な活動を希望致します。
6	大学との連携	法政大学とは、この間、大学に設置されている付属校連携室を基点に連携事業を進めている。高校入学後には、「法政大学憲章を学ぶための付属校生むけ教材開発プロジェクト」による冊子『学びのつながり』を高校 1 年の新入生合宿やホームルームで配布・活用している。内容は、法政大学が掲げる「自由を生き抜く実践知」にもとづき、①法政大学の理念、②法政大学の歴史(大学憲章への道)、③「地球社会の課題」とは何か、④中高生の「実践知」から構成されている。高校 1 年生では、3学期に「キャリアについて考える」ことをテーマに、法政大学の大学生や卒業生(社会人)による進路講演会を実施し、高校での生活や将来の職業について考える機会を持った。また、文理選択適性検査を実施し、将来の進路選択の動機付けを行った。高校1, 2 年生では、「ウェルカム・フェスタ」を実施し、法政大学教員による講演(大学と高校の学びをつなぐ)と座談会(大学での学びの魅力)を通じて、高校・大学における学びの魅力を共有した。また、市ヶ谷・多摩・小金井の各キャンパスに通う現役の大学生(卒業生)を招き、キャンパスや学部、大学生活についての講演会を行った。高校3 年生では、各学部の大学教員による学部別進路講演会を実施した。志望する学部の説明を受け、進路を考える貴重な機会となった。また、推薦学部決定後の「3 年 3 学期プログラム」の取り組みでは、生徒の調査研究活動をふまえたプレゼンテーション大会を実施し、大学教員から講評をいただいたほか、「まとめ」としての論文作成を行った。さらに、大学入学前オリエンテーションや入学前課題などでも大学と連携して取り組んだ。高大連携企画として、ウェルカム・フェスタの他、高校生を対象にワンデー・サイエンス・カレッジ(小金井キャンパス)、多摩キャンパス体験学習プログラム、イングリッシュキャンプを実施し、希望生徒が複数参加した。また、総長杯英語プレゼンテーション大会には、複数の生徒が参加して受賞するなどの活躍がみられた。中学と大学との連携は今後の課題である。次年度も、生徒の進路選択を保障する取り組みを具体的に推進し、連携を深めたい。	左記について異論はありません。

付属校独自課題

No.	評価基準	学校自己評価				学校関係者評価
		年 度 目 標		年 度 評 価		実施日 2025 年 7 月 13 日
		現状と課題	具体的な取組	達成状況	次年度への課題と改善策	学校関係者からの要望、評価等
1	入試広報	今年度も「法政大学の付属校としての学び」の内実と魅力を、受験生・保護者にきちんと伝えることを重視して広報活動を展開した。学外広報イベントは可能な限り参加した。また、時期に応じたテーマを設定し、オンラインを活用した説明会・相談会も展開した。学校説明会、学校公開については、例年通り同じ規模で実施することができた。またオンラインによる説明会、個別相談会も実施し、受験生・保護者のニーズに応え、実際、参加者によるアンケートでも高い満足度が示された。入試については、中高ともに安定的に志願者数を確保した。実施にあたっては、全教職員の協力のもと、無事に終了することができた。結果として適正な選抜方法によって、適正な人数の入学者を確保することができた。今後も本校の教育の中身をより具体的にアピールしていくことが大切となる。その方法については継続的に検討を重ね、積極的に入試広報活動を展開する。				左記について異論はありません。
2	2024 年度学校構想 (国際交流の推進)	長期留学希望者については、前年度より若干増えて、17 名であった。学校が主催する短期研修は、カナダ研修が中止となったため、ニュージーランド短期研修のみとなった。生徒の需要を少しでも満たすためにニュージーランド研修の参加対象学年を高校 3 年まで広げたが、希望者は 30 名に留まり、定員(35 名)を下回った。定員を大幅に上回り選抜を行った前年度に比べると大幅に減ったことになる。昨今の物価高やプログラム参加費用の高騰が主な原因と推測できる。昨年はニュージーランド研修、カナダ研修ともに 30 名ほどが参加していたため、学校が主催する研修への参加者は半減したことになる。しかしその分、各旅行会社が行うプログラムへの参加が増えていることが推定される。国際交流室に置いてある各旅行会社の短期研修のパンフレットをもらいに訪ねて来る生徒は増加傾向にある。おそらく、学校が提供できるプログラムには限りがあるため、そこで満たせていない需要を各旅行会社が満たしているとも考えられる。 オレワカレッジ長期留学プログラムの参加者は、前年度より 2 名増え、年間留学に 2 名、ターム留学に 2 名が参加した。教員交流は、新たに芸術家の教員 1 名が夏季研修に帯同する形で参加し、2025 年 1 月には、オレワカレッジより英語科の先生 1 名を迎えることができた。 学内での国際交流も積極的に行われた。2024 年度は長期留学生(約 1 年)を 3 名(イタリア、スコットランド、アメリカ合衆国)、ターム留学生(3 ヶ月)を 2 名(インド、ブータン)受け入れ、オレワカレッジから 2 名の学生も受け入れた。さらに 1 月より約 1 週間、スウェーデンのクララ高校から 2 名の学生を受け入れた。生徒たちは日常の学校生活、様々な学校行事を通して、留学生たちと交流した。 生徒の国際交流委員会は、日常的な留学生との交流に加え、7 月にタイ文化セミナーの開催、JICA 横浜の訪問(日系移民の歴史を学ぶ)、8 月に韓国の高校生と対面による交流が実現するなど活発に活動した。文化祭では 5 名の留学生たちによる発表や参観者との交流を行い、大盛況であった。次年度も引き続き、活発に活動していく予定である。				左記について異論はありません。